

東亞經濟研究所

京都帝國大學
經濟學部
內學

東亞經濟叢論

第壹卷 第壹號

昭和十六年二月

創刊號

- | | |
|--------------------------|-------------|
| 宋金貿易に於ける茶錢及び絹について…………… | 文學博士 加藤 繁 |
| 中國金融の特殊性…………… | 經濟學博士 小島昌太郎 |
| 支那農村の包稅制度に就いて…………… | 經濟學博士 八木芳之助 |
| 現代支那社會論…………… | 文學士 小竹 文夫 |
| 支那に於ける米の流通機構と其の流通費用…………… | 經濟學士 天野元之助 |
| 墨家の經濟思想…………… | 經濟學士 穗積 文雄 |
| 領用制の進展…………… | 經濟學士 德永 清行 |
| 東亞食糧問題と食糧慣習…………… | 經濟學士 大上 末廣 |
| 買辦制度…………… | 經濟學士 鈴木 總一郎 |
| 支那に於ける教會の社會性…………… | 經濟學士 澤崎 堅造 |
| 支那紡績業に於ける勞働請負制度…………… | 經濟學士 岡部 利良 |
| 中國に於ける聯合準備制度について…………… | 經濟學士 熊本 吉郎 |
| 佛領印度支那の財政…………… | 經濟學士 島本 融 |
| 東亞廣域經濟の貿易政策…………… | 經濟學博士 谷口 吉彦 |

書肆 有斐閣 發賣

年四回（三月、五月、七月、九月）發行

（禁轉載）

東亞食糧問題と食糧慣習

大 上 末 廣

一

一般に食糧問題といふ場合、それは食糧と人口との相對的關係に於いて成立する問題であると理解されてゐる。食糧問題が食糧と人口との相對的關係の問題であると云ふことには、それ自體として何等誤が含まれてゐないとしても、然しこれだけでは甚だ不完全のようである。假にこの定義を單純に解釋するならば、若し一國の人口増加の趨勢と食糧品生産の狀況との間に調和が取れない場合には食糧問題は發生するが、然らざるときは存在しないこととなるであらう。ところが現實の世界の事情をみると必ずしもさうではない。イギリス本國の如く近時國內農業の衰退激しく、國民の必要とする食糧品の凡そ半額をも國內生産にて供給する力がなく、主食糧たる小麥に至つては僅かに需要量の五分の一しか國內の生産で充し得ない國に於いては、食糧問題が國民糧食の不足問題として論ぜられてゐることは言ふまでもない。然るに南東歐の大抵の國々、例へばブルガリヤ、ルーマニア、ハンガリアの國々或はまたアメリカ合衆國等に在つては、國內住民に對する必要供給量以上の食糧品が生産されてゐるに拘らず、これらの諸國に於いても依然として食糧問題は現實に存在してゐるのであり、問題はかゝ

1) 河田嗣郎博士、食糧問題（大阪商大、經濟學辭典、III），P.1411.

る國內食糧自給を如何にして維持し確保して行くかと云ふ形で現はれてゐる²⁾。従つて、食糧問題は、現實には單に人口と食糧との調和即ち需給の關係のみならず、需給關係の調節維持なる目的の下に食糧資源を如何にして保護し、開發し、利用するかのも同時に含むところの問題であるが、然しかゝるものとしての食糧問題は、經濟生活を計畫し統制しつゝ一定の生活目的を實現せんとする意志を前提としてのみ成立し得るであらう。

食糧問題が養ふべき人口に對する食糧不足の問題であり、之を人口の例についてみれば人口過剩の問題として現はれると云ふことを、始めて理論的に説明せんとしたのは言ふまでもなくマルサスである。マルサスはアメリカ大陸の事情に立脚して、人口は二十五年間に倍加して行くけれども食糧生産は僅かに算術級數的にしか増加せず、それ故に食糧不足は不可避的な自然法則であると論定し、この論定に基いて食糧の自然的調節策としての人々の貧困、道德的抑制、戦争等々の必然性を提唱した。彼の食糧問題がかく自然的現象の中に動く自然法則の研究に出發して、自然必然の諸結果を明かにしたものとしては、その限りで何等理論的誤謬の認めらるべきものは無いであらう。然るに従來この説に對して幾多の批判が試みられたが、それらの諸批判の一致する所はほゞ次の點にあると見て差支へない。即ちマルサスの議論は當時の英國や歐洲諸國の實情を基礎として考へるならば、大體に於いて眞であり、又かなり切迫した問題であつたに相違ないが、然しこれを廣く世界的に見るときは成立しない。世界に於ける總人口増加の歩合よりも、食糧生産の進度が急速だからである。世界の未開地方が新たに開發せられてそこに盛な農業が行はれ、その生産物は、また交通運輸の便利が全世界に跨つて隅々まで開け、運賃も格段に低廉となる勢を迎へるに従つて、普く世界に交易せらるゝに至つたからである、と言ふのである。こ

2) "Die Selbstversorgung mit Lebensmittel in der Welt", Wochenbericht des I. f. K. 12 Jahrg. Nr. 5, Feb. 1939.

これらの諸批判の要點は、一見明らかになように、食糧の過不足状態が事實上存在したりや否やと云ふ所に盡きてゐるのであるが、只それだけのことならマルサスの理論と五十歩百歩の差があるのみであらう。重要なことは、食糧の過不足状態が事實あるとしても、これを如何なる立場で捉へるかと云ふことであり、立場の如何によつて問題の性質は自ら分れてくる。一八世紀末の英國國民經濟に國民食糧問題が存在したと言ふならば、それは單に當時の英國が食糧不足の状態に悩んでゐたと云ふのみならず、かゝる國民經濟上の疾患を打開せんとする英國民團體の意志作用も亦存在してゐたことを意味しなければならず、事實また既に近世の統一主義の階段を経て意志經濟として成立してゐた當時の英國國民經濟は、意識的に食糧不足の状態を打開せんとしたのであり、それ故に英國に於ける食糧問題の解決はマルサスの論定したところとは凡そ趣を異にした方向でなされたのである。國民經濟を統制する國家の意志を前提としないでは、單なる食糧の過不足といふ自然現象は存在し得ても、國民食糧問題は成立し難いであらう。

然るに世界經濟に於ける食糧問題に在つては、その性質は之と全く異なる。國民食糧問題と同一性質の食糧問題が世界經濟についても成立するならば、それには先づ世界經濟の意志性が前提にされ、世界的食糧の生産と分配に關する統一的統制が可能であることが先づ論證されねばならぬ。然るにマルサスの『人口論』が發表された當時に於いては、世界經濟の意志性が問題となる所か、世界經濟そのものが成立してゐなかつたのであるから、そこでは世界的規模に於ける食糧の過不足状態そのものに就てすら之を統一的に研究することは全く不可能であつた。國民經濟とは全く別個の系統と秩序をもつ總體經濟たる世界經濟の具體的に成立したのは、十九世紀の中葉

である。従つてこの時期以後始めて世界的食糧問題の研究は可能となるのであるが、然し成立以來既に一世紀に垂んとするこの世界經濟も、今日に於いても尙ほ自然經濟の域を脱せず、意志經濟としての實を具へてゐないから、世界的食糧問題と國民食糧問題の間には大きな性質的相違がある。先述の如く國民食糧問題の研究に關しては、それが基礎理論に關する研究と共に實踐理論の研究が成立し、しかも兩者が内面的に統一されるのは國民團體意志の立場に立つて之をみるからに外ならぬ。然るに世界經濟は意志性のものでない以上、自然的現象としての世界に於ける食糧の過不足狀態や一方の過剰と他方の不足が自ら調和せんとする世界的規模の食糧品の流は之を研究することが可能であつても、この研究から直ちにこれが諸問題を解決すべき實踐理論の研究は生れて來ない。世界經濟を構成する各國民經濟は、今日殆んど例外なしに各々の國民食糧問題に關して意志統制を加はへてゐるが、然し世界經濟の立場からみれば、それは單なる世界經濟の自然の動きに外ならぬのである。要するに食糧問題を單に食糧と人口との關係に關する理論的研究の問題と解するならば、それは國民經濟の上からも世界經濟の上からも可能であるが、單なる理論的研究のみに終らず、これが問題の解決をなすべき實踐的研究をも同時に含まねばならぬとすれば、それは只國民經濟の立場に於ける國民食糧問題として成立するに過ぎないのである。繰返していへば、國民經濟は今日もはや疑もなく國民團體の統一意志即ち國家意志の統制下に立つ總體經濟であり、國家意志が總體經濟の内容たる生産上の分業と消費上の分益を統制してゐるのであるから、こゝでは國民食糧の需要と提供の關係如何の問題とこの關係を如何にすべきかの問題、換言すれば基礎理論の問題と實踐理論の問題は謂はゞ同一問題の兩面をなしてゐるのである。

私がこゝに東亞食糧問題といふは、東亞を一體とせる食糧生産が一體としての人口を果して養ふに足りるや否やを研究對象とするものであり、問題は最初から食糧の自給性確保を目標とする食糧資源の保護、開發、利用の研究を前提としてゐる。地理的には東亞なる地域には、日本、滿洲國、支那は勿論、内外南洋諸國も包含されるのであるが、然しいま若しこれが、日本、滿洲國、支那等の個々の民族的領域が單に集合して成れるものであるならば、そこには日本の國民食糧問題、滿洲國の國民食糧問題、支那の國民食糧問題は夫々成立しうるであらうが、東亞食糧問題たる一つの獨立した問題の成立する餘地は全く存在しないであらう。東亞食糧問題といふ限り、それは既にそこに位する個々の國民經濟を包含しつゝも猶ほこれを越えたより、高次の總體經濟を豫想してゐるのである。所謂東亞經濟若しくは東亞廣域經濟が、先づ總體經濟として獨立してゐることが必要前提である。恰かも國民經濟が個別的な私經濟の集合ではなく、國民團體が主體となつて營む總體經濟であり、しかもこれが國民團體の意志をもつて統制せらるゝ意志性のものであるが故に、國民食糧問題の成立が理論的に可能となると全く同一である。然し乍ら、小論は東亞廣域經濟の總體性と意志性について詳論することを任務としてはゐない。それは何れかの機會にゆづりたい。従つてこゝでは只必要なる限度に於いて、この問題の要點を摘記するにとゞまらねばならぬ。

日本、滿洲國、支那、南洋は自然地理的にアジア大陸なる同一の場所に住んでをり、しかも各々の間の空間的距離も時間的距離も近代交通通信機關の發達によつて愈々短縮されてゐる。その住民は白色人種に對して所謂黃色人種なる一群を形成してゐるが、更らにまたこの血の同一を機縁としてほゞ同一範疇に屬する文化を有してゐるのである。例へば家族についてみても、日本と支那の家族とその道德には幾多の重要なる差異があるとしてみる。

然しこれを個人主義道德の上に立つ西洋の自然家族に對比するならば、日支の家族とも共同主義の原理の上に基礎付けられた複合家族といふ共通の特色をもつてゐる。東亞に位する諸國民は、かくの如く地縁、血縁、文化の三つの紐帶によつて生命的に結合すべき共同の地盤を與へられたものとして既に持つてゐるのである。³⁾いま若しかゝる共同的地盤の上で、極東の諸國民團體が接觸し、連絡し、かくすることに依つて最早や脱退し得ない程度の結合組織に入るとき、こゝにこれらの諸國民團體とは性質の異なる東亞國際團體が成立すると共に、これらの諸國民團體はそれが構成員たる地位に基いて必然的にこの結合組織體の支配をうけるに至るであらう。そして、かくの如き東亞國際團體が一旦成立すれば、それが主體となつて經濟生活を營むに至るが、この經濟生活の組織と運営に一定の秩序が具はる場合、吾々はこれを稱して東亞經濟或は東亞廣域經濟と名命することが出来る。これは現存する二つの總體經濟即ち國民經濟とも世界經濟とも撰を異にするところの總體經濟である。

然らば果してかゝる意味の東亞廣域經濟は存在するであらうか。私は存在するとみる。世界經濟が自由主義の原則の上に運営され、その中にて各國民經濟が曲りなりにも獨立の生活を維持しえらるゝ時代に於いては、國民團體とも國際團體とも異なる東亞國際團體は成立しえないし、従つてまた東亞經濟又は東亞廣域經濟も獨立の總體經濟とは成り難い。この時代に於いては、地縁、血縁、文化の生命的な三紐帶をもつて結合されたる東亞共同體は、たゞ與へられたものとして潜在的にあるに過ぎない。然るに世界經濟がそれ自體の自然運動の結果、數個のブロック經濟に劃分され、それがやがて廣域經濟に發達するに至れば、さきには只潜在的なものとしてあつたに過ぎぬ東亞の共同體的關係は顯在的なものとなり、これを地盤に東亞國際團體と東亞廣域經濟が具體的に成立す

3) 高田保馬博士、東亞民族の形成（經濟論叢，昭和14年1月號），P. 40.

る。以上は世界經濟の觀點に立つて説明したものであるが、翻つて着眼點を國民經濟の上に置くならば、與へられたものとして事實上存在する東亞諸國の共同體的關係が潜在的なものから顯在的なものに成長するのは、東亞諸國民の中で最もよく自覺の高まつた指導者的國民團體の努力の結果であると見ることが出来る。まことに、日清・日露の兩戰役から滿洲事變を経て今次の支那事變にいたる日本國家と民族の努力は、かくの如き自覺の高まり行く一つ一つの階段に外ならなかつたのである。この意味に於いて、東亞廣域經濟を貫く原理は指導者原理であり、そこでは各國民は夫々異なる地位と職能に於いて全體としての東亞を構成するから指導國と協力國との地位が自ら定まつてくる。⁴⁾

日本を指導者國とする東亞國際團體が、今日もはや思辨的構想の域を越えて日滿支三ヶ國の間に現存するのは事實であり、この團體を主體とせる東亞廣域經濟が存在するや否やの事實認定に關する争は既に問題ではなくなつてゐる。問題となる點は只東亞廣域經濟が自然性のもなりや、それともまた意志性のものかに關する論定にかかつてゐるであらう。私はこゝで東亞廣域經濟の性格を定型的に示すがために、便宜上之を國民經濟並に國際經濟に比較するであらう。經濟生活の意志性といふ場合は、國民團體の意志或は國際團體の意志であつて、それ以外に別に經濟生活そのものに意志があるわけではないが、現存する東亞國際團體の意志は日本國民團體の意志を中核體として滿洲國並に支那の兩國民團體の意志の聯合して成れるものである。國民團體の意志は、この基本團體に於ける固有の共同層に體持せらるゝ統一意志であり、⁵⁾國民團體は先天的な存在であるから、國民團體意志も亦先天的な存在であり、不可變のものである。これに對して東亞國際團體の意志は、日滿支の三國家が夫々そ

4) 谷口吉彦博士，新體制の原理，昭和15年，P. 272.

5) 作田莊一博士，自然經濟と意志經濟，P. 163.

6) 同上，P. 177.

の自體性を失はずして連結する所に生ずる合成意志であり、これを構成する各國民團體の協力によりて始めて發動するに過ぎない。一般的にみて國際團體が、世界の各國民團體がよりよき生活を營むがための相對的必要に迫られて相互に連結することによつて生ぜる共同組織であり、従つてこの意志も亦諸國民の聯合意志であると云ふ點に於いて東亞國際團體とは性質的に一致する。兩者はこの點に於いてかく一致するとはいへ、然し一般の國際團體をして成立可能ならしむる所のものは、諸國民團體が只よりよき生活を營まんとして連結すると云ふことのみであつて、これ以外に何ら成立の必然的基礎は存在しないに拘はらず、東亞國際團體に在つては、これ以外になほこれが生成と發展を支持すべき生命的な三同の紐帶があり、この共同體的地盤の上に強く根を植えつけてゐる。この差異にもとづいて等しく合成意志たる兩者の間にも、一方に於ける結合關係の粗放性と他方に於ける緊密性との區別を生じ、従つて又意志活動に強弱の差を生ずるに至る。今日の國際團體が組織的に極めて弛緩し、その意志に分裂作用さへ起つてゐるが、東亞國際團體が正にその反對の狀態に在るは、主として右の如き原因によるのである。東亞國際團體の意志は、今日では單なる合成意志の域を越えて更に成長し、國民團體の統一意志に殆んど性質的に接近せんとする明瞭なる傾向をさへ示してゐる。例へば日滿兩國の國際關係について見よ。滿洲建國當時はなほ潜在的であつた滿洲國の國體は、先の回鑾訓民詔書と昨年七月の國本奠定詔書の渙發によつて世上に明白に顯示され、滿洲國は日本と同様に神命君主國家たることが明らかとなつたが、畏くも天照大神を等しく肇國の元神として奉祀する日滿兩國の行動は、兩國家が夫々に國家の自體性を有しながらもなほ一つのものゝ行動の如くになつてゐる。

かくの如き性質をもつ東亞國際團體の意志統制は、その經濟生活の上にも明瞭に表はれてゐる。日滿支間別して日滿兩國民經濟間に於ける貿易、投資、勞働力の移動の如き、もはや何れも自然の機制に委ねられた自然現象とみることが出來ず、共同目的を實現せんとする東亞國際團體の意識的企圖であるとみるを正當とする。目下進行しつつある日滿支の大規模な富源生産力の開發の如き、或は滿洲國に展開されてゐる開拓民政策の如き、これら一二の例を指摘するだけで説明は充分足りるであらう。國際團體の經濟生活上に於ける意志活動が、自己の總體經濟目的を實現するためのものでなく、只諸國民の總體經濟的目的の實現を調整するものに外ならず、従つて國際投資も國際貿易も國際的勞働力の移住も等しく自然運動に委ねられてゐるに對比せば、東亞廣域經濟の意志性は餘りにも明白であらう。

吾々は先に東亞食糧問題なるものが果して成立しうるやの間に發して茲に到つたのであるが、東亞廣域經濟が右に簡單乍ら説明せる如き性質のものである限り、日滿支の各國民食糧問題の單純なる集合に非ざる東亞食糧問題の研究も亦可能となるのである。重ねていへば、これは東亞に於ける一體としての食糧の生産と消費の按分に關して東亞國際團體の意志の立場から統一的に研究を行ふものであり、従つて單なる食糧需給關係に關する理論的研究のみならず、それが自給性確保を目標とせる食糧資源の保護、開發、利用に關する實踐的研究をもその任務とするものである。かくの如き二つの研究の同時的成立とその内面的統一は、東亞廣域經濟の意志性によつてのみ保證されるのである。

さて食糧は種々の標準から色々に分類されてゐる。營養學の立場からすれば、食糧は二大別されて、礦物質・ビタミン・良質の蛋白質補給の抗病性食物 (Protective Food) と、エネルギー補給の非抗病性食物 (Nonprotective Food) となる。前者は佝僂病・壞血病・甲状腺腫・視力減退等の所謂營養缺乏症や身體の發育薄弱や重要な營養要素に乏しい穀物・砂糖・或る種の脂肪の如き専らエネルギー補給食物から成る食事に基因する所の不健康狀態等を防ぐものであり、¹⁾ 通常牛乳・乳製品・野菜・果實等が之に屬し、後者には一般の穀類・肉類等が屬する。この分類は食糧自給率の内容を判定する如き場合に可成り大きい意義をもつてゐる。例へば自給率が比較的低度でも、國民の食糧が苦力食 (Kuli-Nahrung) に移れば大量の食糧が浮び上り、自給率は一〇〇%以上になるであらうが、然しこの一〇〇%の自給率は決して内容の豐なるものではない。この際かかる判斷の標準となるものは、右の營養學的立場に立てる食糧の分類である。然し乍らこの分類には他面重大な缺陷がある。老大な食糧群の中へ抗病性食物と非抗病性食物との嚴密なる區劃線を引くことが出来ないからである。この缺陷を補ふものは、食糧資源の保護・開發・利用の立場を標準とする食糧の分類であらう。この分類は、獨り右の缺陷を補ふにとどまらず、食糧問題に關して前述の如くこれが需給關係と自給性の二面を同時に包含するものであると云ふ立場をとるときには、より積極的な重要性をもつてくるが、この標準に従へば食糧は、農産食糧・畜産食糧・林産食糧・水産食糧の四種となる。以下私は勿論後者の分類を採用せんとするのであるが、然し右四種の凡てに亘つて論ずることは出来ないから、主として農産食糧を中心に論を進むるであらう。

ところで、いま日滿支の東亞諸民族の食糧慣習をみるに、先づ指摘すべき第一特徴は、凡ての生活費の中で占

1) Astor V, British Agriculture, The Principles of Future Policy. 1938. P. 252.

むる食糧費の割合が西洋諸國に比較して高いと云ふことである。バックは、農家の全生活費の中で食糧・家賃・

		食糧	家賃	衣服	光熱	其他
日	本	42.8	3.1	9.5	5.5	39.1
支	那	58.9	5.3	7.3	12.3	16.2
合	衆 國	41.2	12.5	14.7	5.3	26.2
丁	抹	33.0	10.3		56.7	
					(但衣服・光熱・ 其他三密合計)	

Buck L, Chinese Farm Economy. Shanghai 1930, P. 391.

率の相對的高度は、そこに於ける一般生活標準の低位と共に食糧内容の貧弱さを表示してゐるのであるが、以上指摘した如き第一の特徴は、次に述べるであらう所の第二以下の諸特徴を規制してゐる。

第二の特徴として指摘すべきは、東亞に於ける食糧の根幹をなすものが米・麥・粟その他の穀類であると云ふ

衣服・光熱・その他の夫々占むる百分比を日本・支那・合衆國・丁抹の四國について比較計算してゐるが、この表をみても、食糧費が東洋では相對的に高いと云ふ一般の傾向を伺知しうるのである。かくの如く食糧費のもつ割合が比較的高いのは、東洋の住民が多量のカロリーを攝取し、且つ高級な品種の食物を攝る結果でないことは斷るまでもあるまい。例へば支那の農家が一般に粗食に甘んじてゐることは周知のことであるが、いま支那農家の成年男子當り最低必要食糧量を二、八〇〇カロリーとしても、バックの調査したところに依れば、北方の二三地方のうち一地方までがこの最低標準以下に在り、これら一地方の平均食糧攝取量は僅かに一、四〇六カロリーに過ぎない。²⁾ 凡ての生活費の中で食費が如何なる比率を占むるかは、生活水準の高低を示す指標となり、この比率が低ければ低いほど、より多くの金額を生活を生甲斐あらしむる他の生活品に充てることが出来る。従つて、右の如く日本・支那等に於ける食糧費比

2) Buck L. Land Utilization in China, Shanghai 1937, P. 409.

ことである。いま東西諸民族と比較するに、東亞諸民族の穀類の攝取量は歐米の凡そ二倍に當つてゐるに對して、獸肉・果實・鳥卵・酪農製品・脂肪・砂糖等の消費量は極めて少い。穀類には蛋白・脂肪等の含有量が相對的に少いから、穀類を主要食とする場合には必要量の蛋白・脂肪を攝るため勢ひその消費量を増さねばならぬ。

穀類等ノ一年間消費單位當消費量（珎）

日 本	英 國	獨逸都市勞働者	獨逸農家	獨逸	勞働者	アメリカ工場	アメリカ農家	アメリカ	南京中流階級	中支農家	北支中流階級	北支農家
二一七・八	一一三・一	一三四・〇	一九四・九	一三〇・〇	一三七・八	一一四・二	一一三・九	一一三・三	二二三・三	一九九・九	二二三・六	二二〇・〇
一九・七	含野菜類ニマル	一一・七	二・七	一・七	一・七	六・六	六・二	六・二	二八・三	五・二	三七・六	三六・六
一一四・〇	一五二・〇	一九三・五	三一八・九	一九三・五	一五三・六	二四三・八	一八二・一	一五・四	一二・七	一二・七	三・七	三五・六
四四・三									三三・〇	四〇・〇	三三・七	三三・七

備考 1) International Review of Agriculture. 1939年8月, P.374E.
2) 日本學術振興會, 國民食糧ノ現状ニヨル

リンドステッドに依れば、西洋人の一日攝取食物カロリー平均三、〇〇〇乃至三五、〇〇〇のうち、三〇%乃至四〇%が動物性食物より成るに反して、東洋ではその比率僅かに五%又は一〇%にすぎない。³⁾ 支那農民についてみれば、平均して穀類は食料エネルギー攝取量の八三%を供給してをり、これに豆類・植物油が加はると種實全體で九二%を占めるとに成り、甘蔗・里芋の如き蔬菜類似物は更らに約四%を供給し、その他蔬菜が

一%強、果實及び砂糖も亦一%であるから、残りの僅かに二、三%が畜産物から與へられることとなる。⁴⁾ 北京の勞働者が一日に攝取する全蛋白質のうち僅かに五%又は一〇%が動物性のものであり、日本・朝鮮・ジャバ・北

3) Lindstedt H. Food Consumption Habits in the Far East; International Review of Agriculture 1938. P.404E.
4) Buck, Land Utilization in China PP.409, 401.

部印度ではこの比率大體一〇%乃至二〇%前後であるが、然し攝取蛋白質よりも更らに顯著な差のあるのは脂肪である。西洋では一日の脂肪攝取量は凡そ一〇〇グラム以上である。ところが極東では平均僅かに五〇グラム以下にとどまつてをり、日本の二〇グラム、朝鮮・ジャバの一五グラム以下を、ドイツの一〇九グラム（一九三四—五年）、英國の一四八グラム（一九三四年）等と對比せよ。⁵⁾一般に動物性蛋白の栄養が植物性のものに比して優秀なことは既に栄養學上の定説となつてゐるが、我國の栄養學の權威は日本に關して次の如くに指摘してをられる。我國では肉類の消費は國民一人當に換算すれば僅かに六〇〇匁餘で、米國の二〇貫に比較すれば三十分の一に過ぎず、ドイツの十七分の一に相當する。尤も日本人は魚肉を多量に消費するが、然しこれを加算しても尙ほ一人當り六貫五百匁に過ぎない。更らに乳・卵等を加へて一日一人當の動物性蛋白質の量を計算すれば約一二匁で、全蛋白質量の一三%内外を占むることとなる。歐米では攝取蛋白質量の約五〇%が動物性の蛋白質であるに比較すれば貧弱極まるものである。⁶⁾

かく東亞に於ける食糧慣習の第二の特徴は穀類を主要食とする點にあるが、然しその内容に立入つてみれば、日本・滿洲國・支那等に於いて夫々大なる差異が存在する。日本に於ける食糧は、言ふまでもなく米を主とし、麥類その他の雜穀を従としてゐる。然し同じ日本内地に於いても、麥その他の雜穀類の消費量に對する米消費量の比率は、都會に在つては相對的に高く、また都會と農村を通じて下層階級に至るほど低くなるを普通の傾向としてゐる。東北地方その他の農村に於いて、甘蔗・根菜類或は雜穀の消費が全食糧の殆んど半を占めてゐるものが珍らしくない。この傾向は朝鮮及び臺灣に於いては一層顯著となる。例へば朝鮮についてみれば、米を

5) Lindstedt, ibid. P. 405E.

6) 鈴木梅太郎, 井上兼雄共著, 栄養讀本, PP. 191~2.

主要食とするは都市の中流階級以上と農村の上流階級の極めて少數のものに留るのであり、大多數は、麥類・粟類・玉蜀黍類を主要食としてゐる。また地域的に言へば、京畿道と全羅北道では米を主として麥を副としてをり、慶尙南北道・忠清南北道・全羅南道では米麥相半し、江原道は米・麥・粟の順位、黃海道と平安南道は粟を主として米を副とし、平安北道・咸鏡南北道は粟その他の雜穀を主としてゐる。以上の如く大體の傾向としては南鮮の米作地帯では米消費量最も多く、その主要食は大麥類と米であるに反し、西北鮮の畑作地帯では米の消費量は減じ、食糧は雜穀が主で米が副として組合されてゐるのである。そして食糧消費の上にかくの如き明瞭なる地域的差異の存在するは、農作物の地方的分布をそのまゝ反映せるものに外ならぬ。

農作物の種類の地方的差異が消費食糧の種類とその地域性を決定することは、滿洲國及び支那に於いても同様にあてはまる一般的法則である。滿洲國に於ける食糧の質は朝鮮よりも更に低下するのであるが、一般民衆の常食の對象は高粱・玉蜀黍・粟で、米は勿論小麥すら高級食物に屬する。米や小麥粉は僅かの上流階級の食糧たるに過ぎない。然し乍ら、一般の主要食糧對象たる高粱・玉蜀黍・粟の三者のうち、何れが最も重要な地位を占むるかは、どの農作物がその地方の主作物なるかによつて決定されるのである。遼陽以南及び錦州一帯に及ぶ南滿地方は、總じて果樹・棉花・煙草等を中心とする園藝的細農地帯をなすのであり、こゝでは農作物單作の傾向が最も強く現はれてゐるのであるが、高粱はかゝる南滿の園藝的細農地帯の主なる自家用作物たるのみならず高度の商品作物をなす。然るにこのものはアルカリ土壤に對する抵抗力が弱い上に極寒に堪へ得ない作物であるから、北に向ふに従つて高粱栽培の分布度は次第に淡くなり、克山・北安附近に至つて停まつてゐる。高粱とは

正に反對に、北進するにともない作付歩合の増加するは粟と玉蜀黍である。然し乍ら粟はよく乾燥にたえ、且つアルカリ土性に強いのみならず、その莖稈は唯一の家畜飼料であり、燃料であるから、その栽培地域は北方にのみ偏倚することなく廣く全滿に分布する。玉蜀黍は山岳地帯農業に適する作物であり、安東及び通化省に特に多いとは言ふものゝ、高粱や玉蜀黍に比して更らに低級な作物であるだけに、氣候・土性等の外界の地物自然に制約をうけることは少い。小麥は新江・濱江・三江の諸省を中心とする北滿の主作物であり、鮮農によつてもたらされた滿洲の水稻作は、間島・安東・通化の諸省に分布してゐる。かくの如き農作物の地方的分布を決定する主要條件は、今日なほ滿洲農業に在つては氣候・風土・土壤の如き地物自然の諸要素であり、かくして決定された農作物の地域性が主要食糧の地方的型を打ち出してゐるのである。即ち北部地方の主要なる食糧對象は第一が粟であり、玉蜀黍が之に次ぎて補充的役割を演じ、これに極く少量の小麥が加はつてゐる。中部及び南部では高粱・粟・玉蜀黍の三者並立するといへ、新京附近では高粱が首位にをり、粟と玉蜀黍が混食せらるゝが、安奉線以北の東邊道地帯では玉蜀黍が主要食となり、南滿の園藝的細農地帯の主食物は粟で、これに他的高粱と玉蜀黍が配置されてゐる。

支那に於ける食糧の地域性を端的に現表せるものは、南米・北麵の慣習である。これは、支那の主要農業地帯が揚子江以南の米作地帯と北方の小麥地帯とに二大別せらるゝことの投影に外ならぬ。バックの調査に従へば、農民が多少とも食膳にのぼせる主要食物のうち第一位を占むるは小麥であつて、全調査農家の五分の四までが多少とも小麥を食するが、その内譯は北方に於ける九五%、南方の水田地帯では六四%となつてをり、第二位は米

の五四%で、水田地帯では調査農家の九八%まで食糧に供し、北方では僅かに九%の農家が食するに過ぎぬ。第三位以下は四七%の甘藷、四五%の粟の順であり、前者は水田地に多く、粟の消費は反對に北方地帯に多く、夫々五九%、八三%といふ數を示してゐる。⁷⁾然るに南方の主要食糧の中で米の占むる割合と北方に於ける小麥の割合との間には可成の差異が存在する。南方の水田地帯に於いては全消費食糧に對する米の割合は、大體六〇%以上であり、所によつては九五%に上るところさへある。例へば廣東省新會縣では、全食糧の中で米が九五%、その他の雜穀が二・五%、根菜類二・五%といふ割合になつてゐる。⁸⁾これに反して、北方の小麥地帯に於ける主要食糧は甚だ複雑であつて、たゞ一種類の食糧で五〇%或はそれ以上を占むるものは殆んどないと見て差支へない。獨り農村に於いてのみならず、都會に於いてもさうである。陝西・甘肅は著名な麥食地方であるに拘はらず、陝西に於ける食糧中、小麥の占むる平均率四八%、甘肅三五%に過ぎぬ。その他の北部諸省では粟・高粱・小麥・玉蜀黍などの消費量はほぼ平均してをり、それに燕麥・稷・蕎麥・豆類等が加はるのであるが、これらのうち何が主首を占むるかは、滿洲國の場合と同様にその地方に作付せらるゝ農産物の種類に依つて決定せらるゝのである。北方の農民が小麥を賣つて低級な雜穀を主食物となし、これに反して南方が米を主食物となしてゐると言ふかゝる現象を目して、その原因を北方農民の相對的貧困に歸せんとする人が多いが、然し農民の貧困といふ點に於いては南方も北方も只五十歩百歩の差異あるのみ。要は南方に於ける水稻の作付比率が絶對的大きさを占め、従つて米は比較的低廉であるに對して、北方では小麥の作付比率が割合に多いとはいへ、それが高粱・玉蜀黍・その他の作付を壓倒することなく、相互に割合よく平均してゐる上に、小麥の價格は相對的に高いから

7) Buck, Land Utilization in China P. 406.

8) 曲直生著、滿鐵北支經濟調查所譯；北支民衆食糧ノ初歩的研究（滿鐵調查月報，昭和14年9月），P. 197.

に外ならぬ。

以上の如く東亞の諸民族的領域に於いて夫々消費食糧の種類が異なるのみならず、同一領域内に在つても地方を異にするに従つて種々の變差がみられる點に東亞食糧消費の第三の特徴が指摘される。穀類のうち、最も高級なるは米であり、次に小麥・粟・高粱等といふ順序となる。米や小麥が單に類似蛋白質・カルシウム・磷質を比較的多量に含有すると云ふ栄養學的立場に於いて然るのみならず、これらは生産費のよりかさむ農産物であると云ふ經濟的意味に於いても高級農産物に屬するのである。それ故に支那・滿洲國より朝鮮を経て日本内地に進むに従ひ、米・小麥の消費量の増加するは、夫々の領域に於ける國民經濟發達の水準の相違を反映せるものに外ならぬが、しかも尙ほ注意すべきは、それぞれの地方に於ける食糧消費慣習がそれぞれの地方の農作物の種類によつて決定されてゐることが、東亞を通じての共通特徴をなしてゐることである。斷はるまでもなく、農作物の種類を決定する條件には、地物自然から來るものと經濟的諸關係から來るものと二種あるが、東亞に於いては一般に尙ほ前者がより有力なる作用を營んでゐる。食糧慣習に於ける地域的の發生する基因はこゝに在ると見なければならぬし、又それは一般民衆の購買力の低きことによつて維持されてゐるのである。

第四に指摘すべき特徴は食糧の季節的多様性であるが、これは先の地域性に關する特徴と表裏の關係に立つてゐる。麥出來時には麥のみにて食糲ぎ、秋に入つては米のみに頼り、或は甘藷の消費量が増大する如く、その間季節的調節が行はれ難いのである。けれども、かくの如き季節による消費食物の變化は、大陸諸國に於いて一層明瞭に表はれ、且つ同一の地域でも下層階級ほど激しく、また都市よりも農村に於いて激しい。例へば朝鮮の南

方の下層農民に於いては六月より九月迄が凡て麥食であるが、九月中旬より十月下旬迄は全米食、十一月より一月中旬までは大根を混入した米食、それから麥秋までは麥の割合の累進する米麥混食、その間春秋窮の介在、これが食糧の定型をなしてゐる。然し上層になるほど麥雜穀の年中等配分と自由加減が合理的に出來てゐる。⁹⁾或は北支那の農民についても次のような事情が指摘されてゐる。即ち北支那の食事献立内容は性質上主として季節的である。秋と冬と早春の食物は稷・高粱・玉蜀黍及び晚夏或は晚秋に收穫される甘藷から成つてゐる。春の食物の變化は大麥の收穫と共にやつてき、第二回目の變化は小麥の收穫と共にやつてくる。このその日暮的な生活も平年ならば至極順調に行くのであるが、不作の年になると春大麥を刈取る前に、食ふや食はずの状態が屢々起ることがある。小麥は最上の食料と考へられ、しかも又それは仕事の劇しい季節に必要なものであるから、これらの季節的な食物の中で小麥が一番忙しい時に收穫されると言ふことは好都合なことである。¹⁰⁾滿洲國に於いても同様の事情を看取しうるのであるが、かかる消費食糧の季節的多様性は、かく食糧品の收穫時期によつて先づ條件づけられるのみでなく、價格の變動によつても維持される所の關係である。換言すれば米・麥の價格が安くなればたとひ平常は雜穀を主食とする者も容易に米・麥食に移行するのである。然しそれにも増して重要なことは景氣の變動や作柄の好悪或は時節によつて食糧の單位消費量が變化すると云ふことであらう。例へば濠洲の平均農家世帯では男子單位當の食料消費量は、豊年と凶年で相對的に殆んど變化はない。然るに滿洲或は支那の農民はひどく貧乏線に近づいてゐるので、凶作は直ちに食物攝取量の減少となつて現はれ、反對に豊年は食糧の過剩消費となつて現はれる。同一の諸條件を具へてゐる二地方を比較して、一方では食糧エネルギーが不足を來して

9) 姜挺澤；朝鮮ニ於ケル食糧問題ノ發展過程，（農業經濟研究，第十六卷第二號）P. 40~41.

10) Buck, Chinese Farm Economy, P. 379.

ゐるに拘はらず、他地方では過剰となつてゐる例を屢々みるのは、全く右の如き事情に基くのである。また特に大陸の農村に於いては、農繁期と農閑期では食糧消費量に甚だしい差異がある。一般に冬季の農閑期では粥の二食であり、農耕が開始せらるゝと三食となるのが、滿洲・支那に於いてのみならず、朝鮮の農村に於いても普通の現象である。農繁期に於いても普通食をとる権利のあるものは、働き手たる男子のみで、然らざるものは凡て粥食であるが、主要食糧に對するかゝる統制は非常によく行届いてゐる。かくの如き消費食糧に對する季節的多样性は生活水準の高低と密接な關係をもち、且つそれが特に農村に於いて顯著に現はれるのは生産と農民經濟の自給性の然らしむるところである。

以上私は東亞に於ける消費食糧慣習に關する一般的説明を試みたのであるが、かゝる説明をなす所以は、東亞に於ける食糧の需給關係の構造を明白ならしむる上に必要だからである。

（最初東亞食糧需給問題にまで進む豫定でゐたが、これは都合上次の機會にゆづりたいと思ふ。）